

西アジア新石器時代のメガサイト再考

常木 晃*

Reconsideration of the Neolithic Megasites in West Asia

Akira TSUNEKI

西アジアでは、先土器新石器時代終末に向かって、特にレヴァント地域を中心に 10 ha を超えるような面積を有した超大型の集落が出現するようになる。このいわゆるメガサイトをめぐって、ある程度の社会の複雑化と階層化が進んだ大型の集落が登場したという見方と、単純で平等的な小型の村落が同じ場所に何度も生起して集積したために見かけ上大型に見えるだけだとする、二つの対立した見方がある。この小論では、メガサイトをめぐらした 2 つの対立する見方について整理し、筆者自身が調査に関わってきたメガサイトの一つである、北西シリアに所在するテル・エル・ケルク遺跡の調査成果に基づいて、先土器新石器時代 B 後期から土器新石器時代初頭にかけて、実際に複雑化した大型の集落が出現していたことを主張している。

キーワード：メガサイト、テル・エル・ケルク遺跡、ルージュ盆地、先土器新石器時代 B 後期、レヴァント

In West Asia, the supersized settlements with an area exceeding 10 ha around the Levant region, in particular, appeared toward the end of the Pre-Pottery Neolithic period. Considering these so-called megasites, there are two opposing viewpoints. One is that they were in fact large settlements, including some level of social and hierarchical complexity. Another view is that they were only large in appearance because simple agricultural villages had accumulated in the same place. I first summarize two such opposing viewpoints around the megasites. Next, I discuss how large-scale settlements with some level of social complexity appeared during the Late Pre-Pottery Neolithic B and the beginning of Pottery Neolithic periods, mainly based on the study results from the investigations at Tell el-Kerkh, northwest Syria.

Key-words: megasites, Tell el-Kerkh, Rouj Basin, Late Pre-Pottery Neolithic B, Levant

1. はじめに

西アジアの先史時代において、定住化、農耕牧畜化が進展していく中で、特にレヴァント地域において、先土器新石器時代 B 期の経過に伴い、集落規模が 10 ha を越えるような超大型の集落（いわゆるメガサイト）が発達していく。北西シリアで筆者らが 1997 年から発掘調査を続けてきたテル・エル・ケルク (Tell el-Kerkh) 遺跡もそのようなメガサイトの一つである。この新石器時代のメガサイトについては、実際に超大型の集落が発達したとする考え方と、単にもっと小型の集落がその場所に何度も生起して集積し、見かけ上大型集落に見えるだけだと考える 2 つの見方が対立している。また、その集落運営に関しても、複雑化した階層化社会が出現していたという見方と、平等的な社会がやや大規模化しただけであるとする考えの対立がみられる。先土器新石器時代 B 期 (南レヴァントではさらに同 C 期) を引き継ぐ土器新石器時代に入ってしばらくすると、集落規模が全体的

に縮小する傾向が認められるために、このメガサイトをどのように捉えるかによって、西アジア史、ひいては人類史の発展過程がだいぶ異なって見えることになる。つまり、平等的な小型の集落が集積したとの考え方を採れば、農耕の発達とともに徐々に大規模化、複雑化しつつある社会的プロセスの中の一場面を示すことになり、階層化した大型の集落が存在したとの考え方を採れば、農耕の発達とともに一旦急激に大規模化・複雑化した社会がその後分散化し、銅石器時代以降に再び大規模化していくというように、かなりの紆余曲折を経た社会発展の軌跡を示すことになる。

筆者は以前に、テル・エル・ケルク遺跡での調査成果に基づいて、新石器時代のメガサイトについて、大型である程度複雑化した社会が存在していたとする立場からこの問題を論じたことがある (Tsuneki 2012)。しかしながら、その時に取り上げなかった論考も多数あり、またその後には発表された論考もある。ここではこれらの論考に言及しながら、新石器時代の

メガサイトを再考する。

2. 新石器時代のメガサイト

西アジアにおける新石器化をテーマにした考古学調査は周知のようにザグロス地域イラク・クルディスタンのジャルモ (Jarmo) 遺跡を嚆矢とするが、その後政治的理由で同地域の考古学調査が停滞したこともあり、レヴァント地域とアナトリア地域に調査の中心が移っていった。その中で、1980年代から特にレヴァント地域において、先土器新石器時代B後期(紀元前7600~7000年頃)に、集落規模が10ha内外を超えるような巨大な集落の存在が意識されるようになった。具体的に遺跡を挙げると、南レヴァントでは、アイン・ガザル (Ain Ghazal) (Rollefson 1987; Rollefson and Simmons 1988)、バスタ (Basta) (Gebel et al. 1988; Nissen et al. 1991)、ワディ・シュエイブ (Wadi Shu'eib) (Zeuner 1957)、エス・シフィヤ (Es-Sifiya)、ベイサモン (Beisamoun) (Lechevallier 1978)、北レヴァントでは、テル・アブ・フレイラ (Tell Abu Hureyra) (Moore et al. 2000)、テル・ハルラ (Tell Halula) (Molist 1996)、テル・エル・ケルク (Tsuneki et al. 1997, 1998, 1999, 2000)、アナトリア地域では、アシュクル・ホユック (Aşıklı Höyük) (Esin and Harmankaya 1999)、チャタルホユック (Çatalhöyük) (Hodder 1996, 2007) などである。

先土器新石器時代B後期に出現する巨大な集落は、「巨大集落」(site gigantism) (Rollefson 1997: 241)、「中心集落」(central settlements) (Bienert et al. 2004)、「町」(town) (Simmons 1995; Rollefson 2001: 97)、「原都市」(“proto-urbanism”) (Bienert 2001) など、様々な名称で呼ばれてきたが、それまでの集落とは一線を画するような大規模なものとした。それは時には10haを超える規模を持ち、規模的にはのちの青銅器時代の小型都市にも匹敵した。前述した南レヴァントの事例であるアイン・ガザルを発掘調査していたG. ロレフソン (Rollefson) は、これらを新しいコンセプトや技術の発達を準備し流布させた「地域センター」と見做し、先史時代の飛躍の舞台となったと考えた (e.g. Rollefson 1987)。ロレフソンがそのように主張した背景には、大型のプラスター像に代表されるような特殊な儀礼の址や、多様で遠隔な地域からもたらされた貴石などの搬入品の存在がある。それらは、小型の集落にではなく、このような大型の集落にこそ特徴的にみられると考えられた。

新石器時代の集落の大型化は先土器新石器時代B後期からその終末にかけて生じた現象であると考えられてきたが、2010年代以降に本格的に調査が始められたヨルダンのハラヤシン (Kharaysin) などでは、

先土器新石器時代B中期に、そして一部は先土器新石器時代A期にまで遡る可能性のある大型集落が報告されており、その規模は時に25ha以上に広がっていたと主張されている (Ibáñez et al. 2016; Moník et al. 2018)。また、シリアのユーフラテス川中流域の先土器新石器時代A期から同B期初頭にかけての集落遺跡として名高いジェルフ・エル・アフマル (Jerf el-Ahmar) や同B中期のジャデ・ムガラ (Dja'de Mugara) なども7ha以上の集落規模を有していた可能性が指摘されている (Banning 2011)。つまり、先土器新石器時代における集落の大型化は、土器新石器時代B期後半に突然始まったわけではなく、少なくとも同B中期の紀元前9千年紀中葉には一部の地域や集落で始まっていた可能性がある。

しかし、先土器新石器時代B中期以前の遺跡から報告されている集落の大型化については、いまだその実態は定かではなく、GPRなどの地中探査結果に依拠しているだけの報告も多いので、ここでは先土器新石器時代B後期に顕著に見られる大型集落に焦点を当てて、新石器時代のメガサイトを議論していきたい。

3. 集落大型化の背景

旧石器時代終末のナトゥーフ期に定住性を高めた西アジアの人々は、続く先土器新石器時代A期に定住集落を確立させ徐々に農耕牧畜社会へかじを切り、先土器新石器時代B期にその動きをさらに強めていく。そして、ここでいう先土器新石器時代B後期(紀元前7600~7000年)に、メガサイトと呼ばれる10haを超えるような超大型の集落が出現する(図1)。旧石器時代終末からこの時期までは、西アジア各地において集落は一貫して大型化している。筆者はかつて、レヴァントにおけるこの間の集落規模の変遷と集落形態をまとめた(常木1995:表1)。古い論考になってしまったが、集落に関わる画期として、第1に定住集落が成立したナトゥーフ期、第2に円形プラン住居から方形プラン住居に転換する先土器新石器時代A期終末、第3に街路を有した大型集落が成立する先土器新石器時代B後期を挙げ、それらの画期が生まれたレヴァント内の各地域の差異についても言及した。また、土器新石器時代に入ると集落規模の平均は直前の先土器新石器時代B後期よりも縮小していた。この論考をまとめた後に多くの遺跡が調査されているので、新資料も加えてまとめ直す必要があるが、基本的な集落動態の大枠は現在もほぼ変わらないと考えている。

旧石器時代終末から先土器新石器時代B後期末までの一貫した集落大型化が意味しているのは、地域人口の増大である。地域の環境収容力内であれば、地域

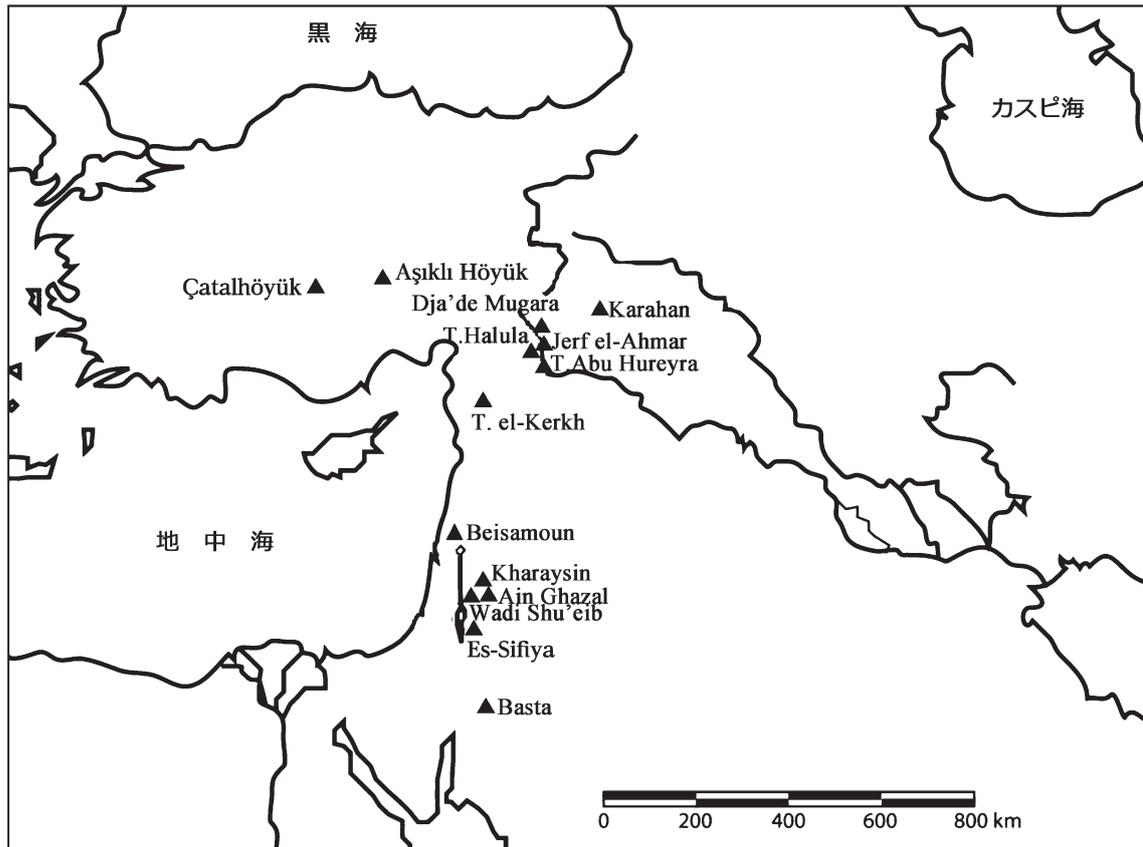


図1 西アジア先史時代のメガサイト

人口の増大は、集落数の増加か集落の大型化で表出する。農耕牧畜を背景として地域の環境収容力自体が高まったり、穀物や家畜のような貯蔵型の食糧開発が進むことで、地域の環境収容力はさらに高まる。

I. カイト (Kuijt) は、新石器時代の人口と社会変化を論じた論考の中で、ある地域の人口増大は、共同体の中の出生率の向上（死亡率の低下）および共同体間の人口移動によって生じるとした (Kuijt 2000)。そして、ナトゥーフ後期から先土器新石器時代C期までの南レヴァントの代表的な集落遺跡の規模と推定人口を算出し（表2）、先土器新石器時代B後期の大型集落の形成を論じている。彼によれば、南レヴァントでは、先土器新石器時代B中期に存在していた集落の内のいくつかが同後期になって大型化する。その要因として考えられるのは、農耕牧畜を背景とした地域人口の増大と、様々な理由による大型集落への人口移動であるとする（図2）。

カイトはまた、先土器新石器時代に見られる遺跡規模の差異を、当時の社会の階層的な差異として認識する (Kuijt 1994)。例えば南レヴァントの先土器新石器時代A期に認められる0.1 haから2.5 haまでの遺跡規模の差異は、家族規模のキャンプから数百人規模の集落までの差異ととらえ、後者の中で既に、儀礼や社会生活のリーダーが芽生えていた可能性までも指摘す

るのである。それに引き続く先土器新石器時代B期にはそうした傾向がさらに強まり、同末期にメガサイトが成立するわけである。同じ文脈で、ロレフソンは先土器新石器時代B期の大型集落に地域内でのセンター形成を見ようとし (Rollefson 1987)、A. シモンズ (Simmons) は内陸砂漠という環境へのユニークな適応としてメガサイトの登場を想定している (Simmons 2000)。

4. 見かけ上の大型集落？

以上のように、新石器時代の大型集落の出現を、人口の増大や社会の複雑化の動きの中で生じた「拠点集落の登場」と理解しようとする考えに対して、大型集落は単に見かけ上大規模に見えるだけで、実際は小型の集落の集積にすぎないとする見解がある。こうした見方の代表的な研究者が、F. ホール (Hole) やP. アッカーマンズ (Akkermans) である。

ホールは、遺跡の大きさを新石器時代集落の規模と混同しないように警鐘を鳴らし、遺跡が見かけ上大きなサイズとなった理由について列挙している (Hole 2000: 194-195)。それは、a) 小さな集落が水平方向に集積した；b) 住居跡は拡散して分布するが、遺物が遺跡全体に散布しているため、集落規模を誤認し

表1 レヴァント先史時代の各文化期における遺跡面積の変遷 (常木 1995 付表)

| 時 期 | 遺跡面積 | | | | | | | | | |
|---------------|--------------------|---------------------------|----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|---------------------------|---------------------------|
| | ~100m ² | 100~ 500m ² | 500~ 1000m ² | 1000~ 2000m ² | 2000~ 5000m ² | 5000~ 10000m ² | 10000~ 50000m ² | 50000~ 100000m ² | 100000m ² ~ | 平均 面積(m ²) |
| Lev. オーリニャック期 | 1 | 9 | — | — | — | — | — | — | — | 170 |
| ケバラ期 | 4 | — | 3 | 1 | — | — | — | — | — | 420 |
| Geo. ケバラ期 | 4 | 1 | 2 | — | — | — | — | — | — | 410 |
| ナトゥーフ前期 | 2 | 9 | 1 | 2 | 4 | — | — | — | — | 840 |
| ナトゥーフ後期 | 3 | 9 | 3 | 2 | 3 | 2 | 1 | — | — | 1,580 |
| 先土器新石器 A 期 | — | — | 1 | — | 2 | 3 | 5 | — | — | 10,890 |
| 先土器新石器 B 前・中期 | 2 | 1 | — | 2 | 4 | 1 | 7 | 1 | 1 | 20,030 |
| 先土器新石器 B 後期 | — | 5 | — | — | 4 | 1 | 5 | 1 | 6 | 42,640 |
| 土器新石器期 | 2 | 2 | 1 | 1 | 3 | — | 6 | 3 | 2 | 32,860 |

表2 南レヴァントにおける先史時代遺跡の規模と推定人口の変遷 (Kuijt 2000: Tab. 1)

| Period | Site | Approximate depth of cultural deposits | Site area (ha) | Estimated population level ^b | Estimated population level ^c | Mean population level ^d |
|-----------------|---------------------|---|----------------------|---|---|--|
| Late Natufian | 'Ain Mallaha (Ic/b) | <1 m | 0.2 | 18 | 59 | 59 |
| | Nahal Oren | <1 m | 0.2 | 18 | 59 | |
| | Hatoula (4a,b,5) | <1 m | 0.2 | 18 | 59 | |
| | Saaidé II | <1 m | 0.2 | 18 | 59 | |
| | Shukbah | <1 m | 0.2 | 18 | 59 | |
| PPNA | Jericho | 8 m | 2.5 | 225 | 735 | 332 |
| | Netiv Hagdud | 3 m | 1.5 | 135 | 441 | |
| | Gilgal I | 3 m | 1.0 | 90 | 294 | |
| | Dhra' | 2.5 m | 0.45 | 41 | 132 | |
| | Nahal Oren | 2 m | 0.2 | 18 | 59 | |
| MPPNB | 'Ain Ghazal | 3 m | 4.5 | 405 | 1323 | 764 |
| | Tell Aswad | ? | 4 | 360 | 1176 | |
| | Jericho | 4 m | 2.5 | 225 | 735 | |
| | Yiftahel | 1.5 m | 1.5 | 135 | 441 | |
| | Kfar Hahoreshe | 2 m | 0.5 | 45 | 147 | |
| LPPNB | Basta | 4 m | 14 | 1260 | 4116 | 3293 |
| | 'Ain Ghazal | 1.5 m | 10 | 900 | 2940 | |
| | Wadi Shu'eib (?) | 4 m | 10 | 900 | 2940 | |
| | Beisamoun | 2 m | 10 | 900 | 2940 | |
| | Es-Sifiya | 3 m | 10 | 900 | 2940 | |
| | 'Ain Jammam | 3 m | 6-8 (7) | 630 | 2058 | |
| | Ramad I | ? | ? | ? | ? | |
| PPNC/Final PPNB | 'Ain Ghazal | 1 m | 12 | 1080 | 3528 | 3822 |
| | Basta (?) | ? | 14 (?) | 1260 (?) | 4116 | |
| | Ramad II (?) | ? | 2 (?) | ? | ? | |

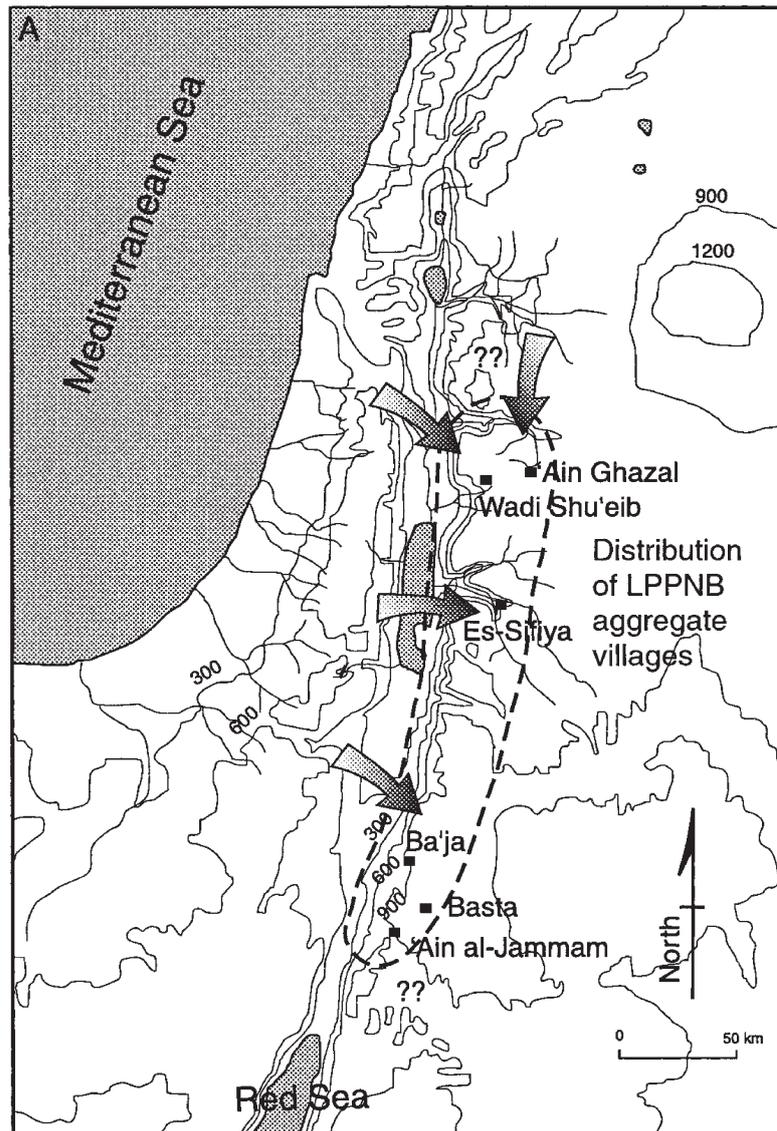


図2 南レヴァント先土器新石器時代B後期における大型集落の形成概念図 (Kuijt 2000)

た；c) ドメスティックな目的以外に用いられた大きなスペースを使った遺構があったため；d) 多くの通常のユニットが季節的に集積した；などなどであり、それぞれの「メガサイト」形成の背景もさまざまであったとする。ホールは、集落規模の顕著な差異もまた、新石器時代には認められないと主張する。新石器時代のほとんどの集落は1 ha かそれ以下であり、先土器新石器時代B後期の大型集落は8~12 ha であるが、その差異は「たかだか10倍」ほどしかなく、R. フレッチャー (Fletcher) が言うような歴史上の大変革 (Fletcher 1987: 65) が生じた時に表出する差異 (100倍) とは到底比べようもないと主張する。「メガサイト」の内実を見ても、より小さな集落と比較して、遺構や物質文化面でもほとんど差異が認められないとして、地域の中心地として他の小さな集落と異なる

論理で運営・組織化されていたとは思えないと言うのである。

アッカーマンズは、北シリアのテル・サビ・アビヤド (Tell Sabi Abyad) (先土器新石器時代B後期~ハラフ前期) での発掘調査に長期に取り組んでいて、その遺跡の在り方と発掘成果から、大型の集落は小さな集落の集積であると主張している (Akkermans 2012)。テル・サビ・アビヤドは隣接した4つの異なる遺丘から形成され (図3)、それぞれははっきりと区分できる。このうちテル・サビ・アビヤドI号丘が最も大型の遺丘であるが、これは見かけ上一つに見えるが、実際には小さな4つのマウンドが時間をかけて集積したものとされる (図4)。このことから、アッカーマンズは、考古学的な遺丘の多くは実際には一部しか居住されていなかったと主張する。非居住部

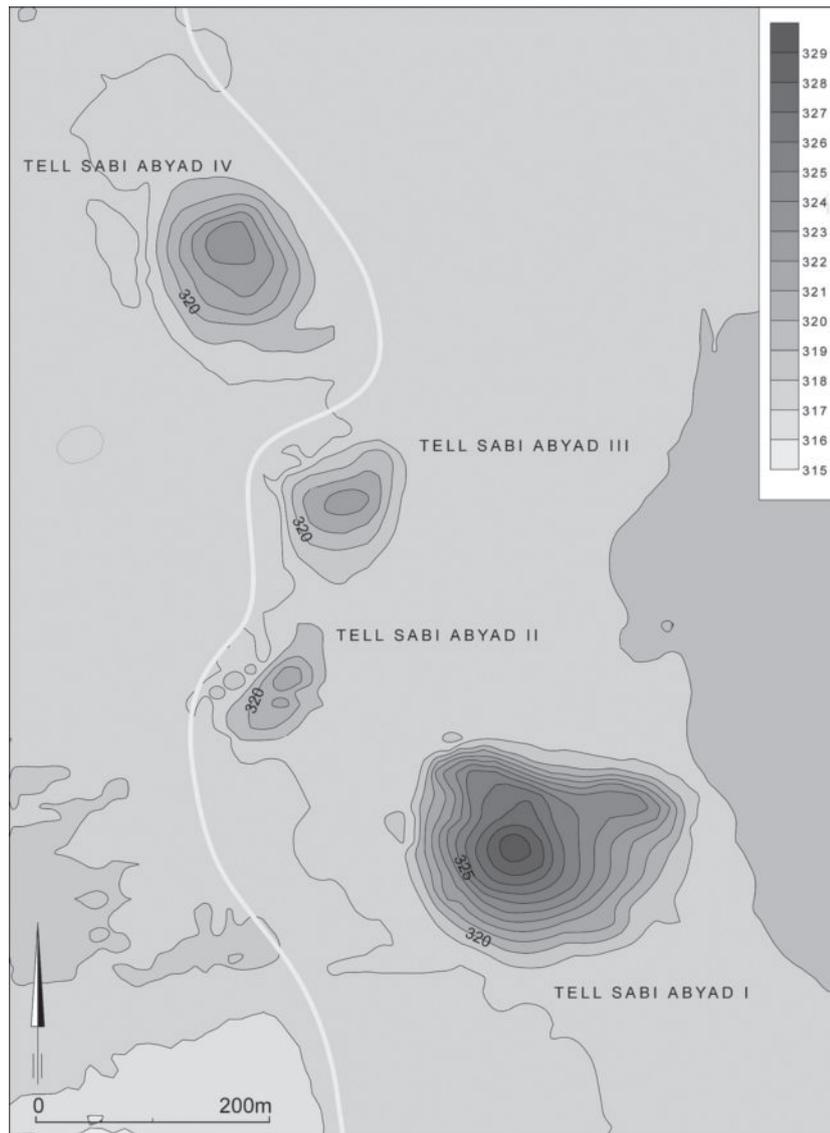


図3 テル・サビ・アビヤドの4つの遺丘 (Akkermans 2013: Fig. 1)

分は、住居群どうしの隙間であったり、祖先のかつての住居区であったりするのだと言う。ここで主として議論されているテル・サビ・アビヤドI号丘は、土器新石器時代層（紀元前7000~5800年）が文化堆積の中心となっていて、最大で見積もっても5haには満たず、ここで議論している先土器新石器時代のメガサイトには当たらないが、こうした居住地区移動 (relocation, shifting settlements) は、新石器時代の居住ではしばしば認められ (Akkermans 2012)、先土器新石器時代B後期のメガサイトの理解にも普遍化している。

集落が見かけ上大型化したという主張とはやや異なるが、チャタルホユックなどのメガサイトの規模と社会組織について、南西アメリカの後期プレヒスパニック期とその後のプエブロの集落の社会との比較研究を行い、西アジア新石器時代のメガサイトを「大きな村

落」と捉えることができると、W. ベルナルディーニ (Bernardini) らは主張している (Bernardini and Schachner 2018)。彼らもまた、新石器時代のメガサイトが、見かけよりもずっと人口規模が小さく、それほど複雑化していない単純な社会であったと捉えている。

さて、以上まとめてきたように、西アジアの特に先土器新石器時代B後期のいわゆるメガサイトをめぐって、二つの基本的な対立があることが明確になった。それは、非常に大型で複雑化した階層化社会が内包された集落が出現したという見方と、小型の集落が時間をかけて集積しただけで、内包されているのも比較的単純で平等的な社会であった、という見方である。

5. テル・エル・ケルクからの視点

このような対立的な見方から捉えられている先土器



図4 テル・サビ・アビヤドI号丘に見られる4つの低いマウンド (Akkermans 2013: Fig. 2)

新石器時代後期メガサイトの実態を掘り下げるにはどうしたらよいのだろうか。筆者自身が発掘してきた北西シリアのテル・エル・ケルク遺跡での集落動態について今一度振り返ることで、この問題に対する筆者なりの見解を提出しておきたい。

テル・エル・ケルク遺跡は、北西シリアのイドリブ県ルージュ盆地南部に位置する新石器時代～ローマ・ビザンツ時代の巨大な複合遺跡で、1992年にテル・エル・ケルク2号丘で試掘調査が行われたのち、1997年から2010年にかけて、12シーズンにわたってテル・アイン・エル・ケルク (Tell Ain el-Kerkh) の発掘調査が、シリア文化財博物館総局と筑波大学の共同調査として実施された。調査の主目的は、ケルクに存在していたと想定される新石器時代の大型集落を対象として、新石器時代集落の開始、それに引き続く社会の複雑化、大型化がどのように、そしてなぜ生じたのかについて、実際の考古学的な発掘調査を通じて解明することにあった。

ルージュ盆地の新石器時代のセトゥルメント・パターンを追跡すると、先土器新石器時代B後期に当たる Rouj 1c 期 (紀元前 7600～7000 年) では集落数は少ないものケルクを中心とした階層的な集落パターンが認められる。また、次の土器新石器時代前期の Rouj 2a-b 期 (紀元前 7000～6600 年) と同中期の

Rouj 2c 期 (紀元前 6600～6100 年) では、やや規模の格差は薄れるものの、ケルク (北部ではテル・アレイ [Tell Aray]) を中心とする階層的な集落パターンは継続している。それに対して土器新石器時代後期の Rouj 2d 期 (紀元前 6100～5800 年) では盆地内は 2 ha 以下の小型の集落ばかりが分布するようになり、ケルクでもこの時期の集落は 1 ha に満たない小さなものに縮小する (図5)。つまり、セトゥルメント・パターンには Rouj 2d 期を除いて、それぞれの時期に大型の集落と小型の集落という、階層的なパターンが認められ、ケルクの集落はその頂点に立っていた。

ケルクでは、実際にどのように集落規模が変遷したのだろうか。テル・エル・ケルク遺跡各所に設けた発掘区での層位の在り方及び調査状況、遺物の分布などに基づいて、筆者は以下のように集落規模の変遷を算出した (図6, Tsuneki 2012: Figs. 9.1-9.5)。先土器新石器時代B前期に当たる Rouj 1a 期 (紀元前 8700～8300 年) では、テル・アイン・エル・ケルク北西のごく一部に 0.5 ha にも満たないごく小さな集落が出現している。その後数百年間のヒアタスを経て、先土器新石器時代B後期の Rouj 1c 期にケルクでの居住は再開され、集落は瞬く間に拡大し同期終末には集落規模は 16 ha にも達した。次の土器新石器時

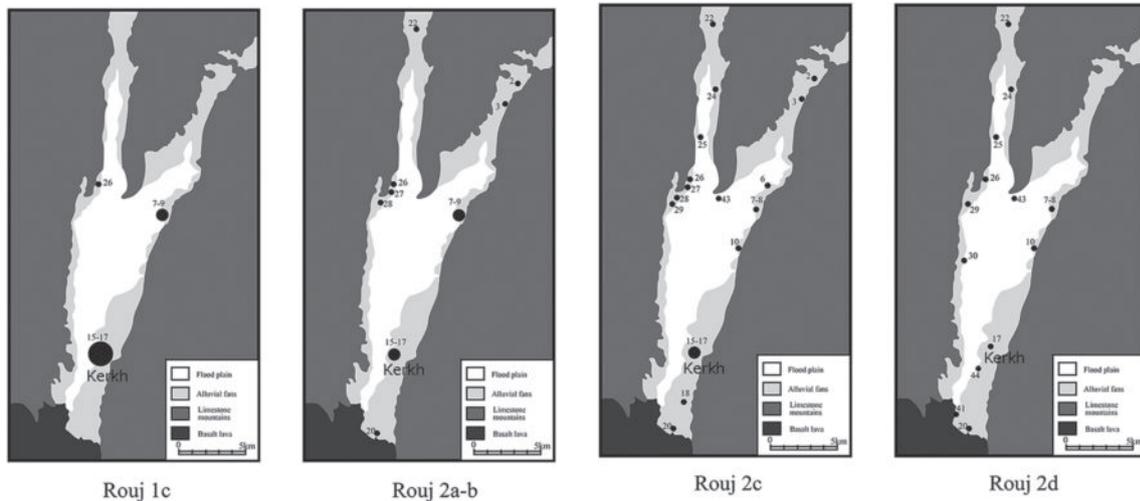


図5 ルージュ盆地における新石器時代の集落パターンの変遷 (Tsuneki 2012: Fig. 6)

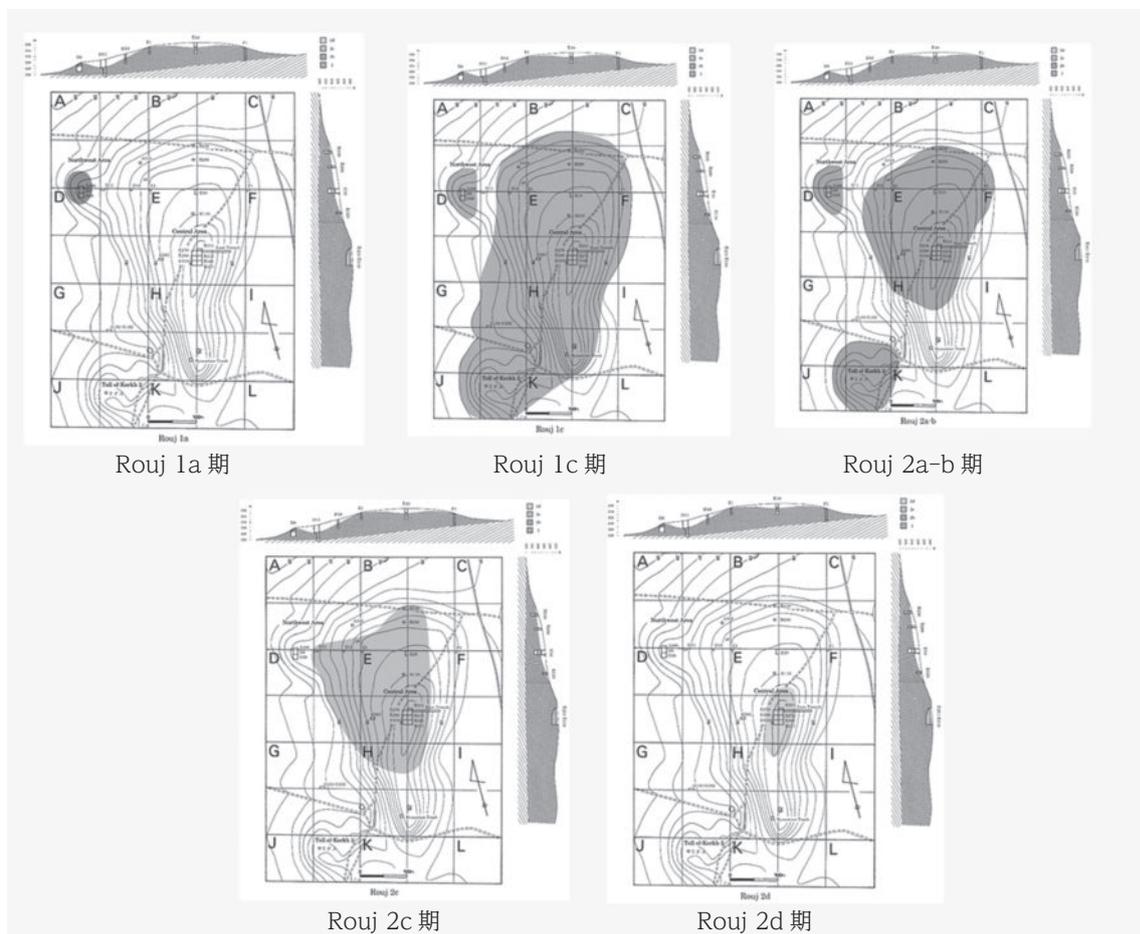


図6 Rouj 1a期~Rouj 2d期のテル・エル・ケルク推定集落範囲の変遷 (Tsuneki 2012: Figs. 9.1-9.5)

代初頭の Rouj 2a-b 期においても 10 ha 内外の集落規模が保たれ、土器新石器時代中期の Rouj 2c 期には 6 ha ほどの規模の集落へとやや縮小したと考えられた。土器新石器時代後期の Rouj 2d 期の居住層はテル・アイン・エル・ケルクの中央部のみで確認され

ており、集落規模は 1 ha に満たない。この時期を最後にケルクにおける新石器時代の居住は終了している。

図6からも分かるように、Rouj 1c 期や Rouj 2a-b 期の集落は、遺跡全域を占有しているわけではなく、居住域はいくつかに分離して存在している。例えば

Rouj 1c 期では、アイン・エル・ケルク北西部に 1 ha ほどの居住区があり、そのほかの居住区はアイン・エル・ケルクからケルク 2 号丘にかけて広がっている。Rouj 2a-b 期では、アイン・エル・ケルク北西部、同中央部とケルク 2 号丘に、それぞれ 1 ha、7 ha、2 ha 程度の居住域が並立していたと筆者は見ている。これらの分離した居住域は、前述したテル・サビ・アビヤドでアッカーマンズが想定した居住区移動と見做すこともできないことはないが、各居住区での文化堆積の厚さと堆積速度などを検討してみると (ibid: 61-63)、これらがすべて居住区移動で堆積した文化層とするには、それぞれの文化層の堆積が圧倒的に厚すぎることが問題である。

例えば Rouj 2a-b 期に 2 ha 程度の集落が 4~5 回程度居住区を移動してこの文化堆積を残したとしよう。Rouj 2a-b 期は約 400 年間なので 1 回の居住期間 (約 80~100 年間) で、アイン・エル・ケルク北西区では 0.5 m、ケルク 2 号丘では 2.2 m の当該期文化層が堆積したことになる。アイン・エル・ケルク中央区では発掘区は Rouj 2a-b 期の文化層に到達していないが、想定エレベーションから考えると、Rouj 2a-b 期及びその下層の Rouj 1c 期文化層は合わせて厚さ 4 m 以上になる。北西区の Rouj 2a-b 期の文化層は薄いので、80~100 年間で 0.5 m の文化堆積が生じる可能性は否定できないが、ケルク 2 号丘やアイン・エル・ケルク中央区での 2 m (あるいはそれ以上) ほどの厚さの文化層が、80~100 年間で堆積したと考えるのは無茶であろう。アイン・エル・ケルク中央区で発掘された Rouj 2c-2d 期文化層の堆積速度は、1 年間あたり平均で 0.44 cm であるので (ibid: 62)、もし同様の堆積速度で文化層が堆積したと仮定すると、80~100 年でせいぜい 0.4 m といったところである。Rouj 2a-b 期に 2 ha 程度の集落が 4~5 回居住区移動するためには、同時期のアイン・エル・ケルク中央区の集落範囲が 7 ha あるので、同区域内だけでも 3~4 回の居住区移動が必要になる。したがって、1 回当たりの居住区移動で堆積が想定される文化層はさらに薄く見積もられる必要がある。したがって、ケルクでの新石器時代の文化堆積を、居住区移動を前提に考えることは全くもって不可能であることを強く主張しておきたい。つまり、文化堆積の厚さを考えるならば、ケルクでの Rouj 1c 期や Rouj 2a-b 期、あるいは Rouj 2c 期の集落は、基本的に、それぞれの時期にほぼ全域で居住されていたはずなのである。頻繁な居住区移動を想定するには、もっと薄い文化堆積が水平方向に広がっている遺跡であるか、あるいは想定する時代の文化層が非常に長い時間をカバーしている遺跡でなければならないのである。

ケルクの大型集落は、Rouj 1c 期が進むにつれて最

大に達し、続く Rouj 2a-b 期、Rouj 2c 期とやや規模を縮小して継続した。この後、Rouj 2d 期に急激に集落規模を縮小させているため、Rouj 1c 期の後半ごろから Rouj 2c 期までの集落、より広範なレヴァント先史時代編年でいうと、先土器新石器時代 B 後期から土器新石器時代半ばごろ (北メソポタミアのハラフ期以前) までのケルクの集落を、ここではメガサイトの範疇に含めておきたい。集落範囲が約 10 ha から約 6 ha へと縮小した Rouj 2c 期集落をメガサイトに含めることには異論があるかもしれない。しかしながら、後述するように、大規模で複雑化した共同体による活動を示す遺構や遺物が同時期の文化層で検出されている。また、前述のカイトの集落規模表 (表 2) に基づけば、南レヴァントのほぼ同時期に当たる先土器新石器時代 C 期/先土器新石器時代 B 終末期に帰属するアイン・ガザルやバスタなどでは、大型の集落が先土器新石器時代 B 後期に引き続き維持されていた。また、アナトリアのメガサイトの代表例ともいえるチャタルホックは、その集落の最大繁栄期が紀元前 7 千年紀にあり、これも年代的にはケルクの Rouj 2c 期とほぼ併行する。

ケルクの発掘調査では、Rouj 2c 期の文化層は比較的広い発掘区が設けられて調査が進んでいるが、それ以前の Rouj 2a-b 期及び最も大型の集落が想定される Rouj 1c 期の発掘区は残念ながら非常に限られた範囲にとどまっている。しかしながら、このわずかな範囲しか調査されていない Rouj 1c 期のトレンチ調査の範囲内から、集落の共同活動を示すような遺構や遺物がいくつか発見されている。最も注目されるのが、東トレンチの Rouj 1c 期層から発見された大型のビンを 14 以上も連ねた大型の倉庫である (図 7)。各ビンは、2~3 個ずつ小部屋に並んで据え付けられており、いくつかのビンからは山羊の角や石器が発見されている。そのうちの 1 つのビンからは 200 点近くの淡水産の巻貝の覆面部に穿孔したビーズがまとまって出土した (図 8)。千葉中央博物館の黒住耐二氏に同定していただいたところ、*Viviparus syriacus* というタニシ類であることが判明した。このタニシ類は新生代の化石種で、シリアでは更新世の地層の露出したオロンテス川流域で産出する。今一つは、北西区の Rouj 1c 層およびアイン・エル・ケルクの西裾でケルク 2 号丘の北側に設けた G191-G192 トレンチの Rouj 1c 層から検出された、大量のフリントの鎌刃用石刃ブランクが貯蔵されたキャッシである (図 9、図 10)。石刃ブランクの数は前者が 86 で、後者が 33 である。1 つの鎌に装着されるブランクは多くて 4~5 本であるので、前者では 20 個前後の、後者でも 8 個前後の鎌を製作することができる。これらの大型倉庫と鎌刃用石刃ブランクのキャッシは、個人や 1 家族の



図7 東トレンチで発見された先土器新石器時代B後期の共同貯蔵庫



図8 ビンの一つから出土したタニシ類のビーズ



図9 北西区 Rouj 1c 期文化層で発見された石刃ブランクのキャッシ



図10 アイン・エル・ケルク西裾 Rouj 1c 期文化層で発見された石刃ブランクのキャッシ

残したのではなく、集落共同の施設の一部であったと想定できよう。特に前者は、儀礼用などに使用された可能性の高い装身具を多量に貯蔵しており、集落共同体のための施設であったと想定されよう。

Rouj 2a-b 期及び、特に広範囲で発掘調査が行われた Rouj 2c 期の文化層からは、共同製粉・調理場、共同墓地、遠隔地との長距離交易、偽トルコ石ビーズなどの高度な工芸、専門的な石器生産などに示されるように、世帯をはるかに超え集落共同で実施された協業の存在が想定される遺構や遺物が数多く検出、出土している。筆者は特に社会の複雑化に伴って生じた所有権の顕在化を示す遺物である印章と封泥システムに興味を抱いてきたが、その嚆矢は Rouj 1c 期の文化層から出土した、後の印章と同様の文様が刻まれた小さな石板であり（図 11 左）、Rouj 2a-b 期の文化層からは最初の印章が出土し（図 11 中・右）、Rouj 2c 期には発達した多数の印章と、印影の押捺された封泥が出土している。こうした遺構や遺物は、小さな村落遺跡からはなかなか報告されず、地域の拠点的な集落、しいて言えば、メガサイトであるケルクだからこそ出土する遺構や遺物群であると言えるだろう。

まとめに代えて

本論では、西アジア先土器新石器時代B後期に登場するいわゆるメガサイトについて、それが実際に非常に大型の集落で、複雑化・階層化した社会が内包されていたという見方と、実際は小型の集落が時間をかけて集積した見かけ上のメガサイトで、内包されている社会も比較的単純で平等的な社会であった、という見方の対立についてまとめ、北西シリアのテル・エル・ケルクの事例を振り返りつつ、筆者なりの見解を示した。筆者の立場は、もちろん前者の見方に近い。

そもそも、セトゥルメント・パターンで示したように、先土器新石器時代B後期から土器新石器時代初頭にかけて、2 ha 以下の小型の集落と、10 ha を越えるような大型の集落が併存していることは疑いようがない。メガサイトを見かけ上の大型集落と言うのであれば、なぜこの時期に何度も居住区移動を繰り返して集積した集落を造るのか、あるいはなぜスペースを空けてまでドメスティックではない地区を集落に造るのか、あるいは見かけ上とはいえ大型の居住域を集積させるのはなぜなのか、などなど、小型集落が存在しているにもかかわらず見かけ上の大型集落を形成する理



図 11 ケルクから出土している最初期の印章（左 Rouj 1c 期、中央・右 Rouj 2a-b 期）

由を、「見かけのメガサイト」主唱者たちは説明しなければならない。ケルクのメガサイトにみられるように、世帯用をはるかに超えた集落共同体用の施設と言える大型倉庫の存在や、その他様々な共同体協業の結果と思われる施設や遺物が、同時代の小型集落では希薄であることについて、「見かけのメガサイト」主唱者たちは答えを出さなければならない。ただし、メガサイト内の住居や墓の規模や形態に顕著な差異はなく、共同体社会の階層差は顕在化していない。

西アジアの新石器時代において、本格的な生産経済が深化していった先土器新石器時代 B 期中葉以降、レヴァントでは急激に集落の集中化や共同体強化の動きが起こり、メガサイト形成へと向かっていった。そのことをきっちりと評価しないと、西アジア史の重要な画期と歴史プロセスを大きく見誤りかねないのではないか。

参考文献

- Akkermans, P. M. M. G. 2012 Living Space, Temporality and Community Segmentation: Late Neolithic Settlement in Northern Syria. In O. P. Nieuwenhuys, R. Bernbeck, P. M. M. G. Akkermans, and J. Rogasch (eds.), *Interpreting the Late Neolithic of Upper Mesopotamia*, 63-75. PALMA Series 9, Turnhout, Brepols.
- Akkermans, P. M. M. G. 2013 Tell Sabi Abyad, or the Ruins of the White Boy: A Short History of Research into the Late Neolithic of Northern Syria. In D. Bonatz and L. Martin (eds.), *100 Jahre Archäologische Feldforschungen in Nordost-Syrien - eine Bilanz*, 29-43. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Banning, E. B. 2011 So Fair a House: Göbekli Tepe and the Identification of Temples in the Pre-Pottery Neolithic of the Near East. *Current Anthropology* 52(5): 619-660.
- Bernardini, W. and G. Schachner 2018 Comparing Near Eastern Neolithic Megasites and Southwestern Pueblos: Population Size, Exceptionalism and Historical Trajectories. *Cambridge Archaeological Journal* 28(4): 647-663.
- Bienert, H.-D. 2001 The Pre-Pottery Neolithic B (PPNB) of

Jordan: A First Step towards Proto-urbanism? In G. Bisher (ed.), *Studies in the History and Archaeology of Jordan VII*, 107-119. Amman, Department of Antiquities.

- Bienert, H.-D., H. G. Gebel and R. Neef 2004 *Cultural Settlements in Neolithic Jordan*. SENEPSE 5. Berlin, Ex Oriente.
- Campbell, S. and A. Fletcher 2012 Scale and Integration in Northern Mesopotamia in the Early 6th Millennium cal. BCE. In O. P. Nieuwenhuys, R. Bernbeck, P. M. M. G. Akkermans and J. Rogasch (eds.), *Interpreting the Late Neolithic of Upper Mesopotamia*, 39-50. PALMA Series 9. Turnhout, Brepols.
- Cohen, M. N. 1985 Prehistoric Hunter-Gatherers: The Meaning of Social Complexity. In T. D. Price and J. A. Brown (eds.), *Prehistoric Hunter-Gatherers: Emergence of Cultural Complexity*, 99-119. New York, Academic Press.
- Esin, U. and S. Harmankaya 1999 Aşıklı. In M. Özdoğan and N. Başgelen (eds.), *Neolithic in Turkey, The Cradle of Civilization*, 115-132. Istanbul, Arkeoloji ve Sanat Yayınları.
- Fletcher, R. 1987 Settlement Archaeology: World Wide Comparisons, *World Archaeology* 18: 59-83.
- Gebel, H. G., M. Muheisen and H. J. Nissen 1988 Preliminary Report on the First Season of Excavations at the Late Aceramic Neolithic Site of Basta. In A. Garrard and H. G. Gebel (eds.), *The Prehistory of Jordan*, 101-134. BAR International Series 396. Oxford, British Archaeological Reports.
- Hodder, I. 1996 Çatalhöyük: 9000 Year Old Housing and Settlement in Central Anatolia. In Y. Sey (ed.), *Housing and Settlement in Anatolia: A Historical Perspective*, 43-48. Istanbul, Tarih Vakfı Yayınları.
- Hodder, I. (ed.) 2007 *Excavating Çatalhöyük: South, North and KOPAL Area Reports from the 1995-99 Seasons*. Cambridge, McDonald Institute for Archaeological Research.
- Hole, F. 2000 Is Size Important? Function and Hierarchy in Neolithic Settlements. In I. Kuijt (ed.), *Life in Neolithic Farming Communities: Social Organization, Identity, and Differentiation*, 191-209. New York, Kluwer/Plenum Press.

- Ibáñez, J. J., J. Muñiz, E. Iriarte, M. Moník, J. Santana, L. Teira, and R. Rosillo 2016 Kharaysin: A PPNA and PPNB Site by the Zarqa River 2014 and 2015 Field Seasons. *Neo-Lithics* 2/15: 2-19.
- Kuijt, I. 1994 Pre-Pottery Neolithic A Settlement Variability: Evidence for Sociopolitical Developments in the Southern Levant. *Journal of Mediterranean Archaeology* 7(2): 41-68.
- Kuijt, I. 2000 People and Space in Early Agricultural Villages: Exploring Daily Lives, Community Size, and Architecture in the Late Pre-Pottery Neolithic. *Journal of Anthropological Archaeology* 19: 75-102.
- Lechevallier, M. 1978 *Abu Gosh et Beisamoun: deux gisements de VII millénaire avant l'ère chrétienne en Israël*. Paris, Masson.
- Molist, M. M. (ed.) 1996 *Tell Halula (Siria): Un Yacimiento Neolítico del Valle Medio del Eufrates: Campañas de 1991 y 1992*. Madrid, Instituto del Patrimonio Histórico Español.
- Moore, A. M. T., G. C. Hillman and A. J. Legge (eds.) 2000 *Village on the Euphrates: From Foraging to Farming at Abu Hureyra*. Oxford, Oxford University Press.
- Moník, M., Z. Lend'áková, J. J. Ibáñez, J. Muñiz, F. Borrell, E. Iriarte, L. Teira and F. Kuda 2018 Revealing Early Villages - Pseudo-3D ERT Geophysical Survey at the Pre-Pottery Neolithic Site of Kharaysin, Jordan. *Archaeological Prospection* 25(4): 339-346.
- Nissen, H. J., Muheisen, M. and Gebel, H. G. 1991 Report on the Excavations at Basta 1988, *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 35: 13-40.
- Rollefson, G. O. 1987 Local and Regional Relations in the Levantine PPN Period: Ain Ghazal as a Regional Center. In A. Hadidi (ed.), *Studies in the History and Archaeology of Jordan III*, 29-32. Amman, Department of Antiquities of Jordan.
- Rollefson, G. O. 1997 Changes in Architecture and Social Organization at 'Ain Ghazal. In H. G. Gebel, Z. Kafafi and G. Rollefson (eds.), *The Prehistory of Jordan II: Perspectives from 1997*, 287-307. Berlin, Ex Oriente.
- Rollefson, G. O. 2001 Jordan in the Seventh and Sixth Millennia BC., In G. Bisheh (ed.), *Studies in the History and Archaeology of Jordan VII*, 95-100. Amman, Department of Antiquities.
- Rollefson, G. O. and A. H. Simmons 1985 The Early Neolithic Village of 'Ain Ghazal, Jordan: Preliminary Report on the 1983 Season. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research. Supplementary Studies* 23: 35-52.
- Rollefson, G. O. and A. H. Simmons 1988 The Neolithic Settlement at Ain Ghazal. In A. Garrard and H. G. Gebel (eds.), *The Prehistory of Jordan*, 393-421. BAR International Series 396. Oxford, British Archaeological Reports.
- Simmons, A. 1995 Town Planning in the Neolithic - Is 'Ayn Ghazal "Normal"? In K. Amr, F. Zayadine and M. Zaghoul (eds.), *Studies in the History and Archaeology of Jordan V*, 119-122. Amman, Department of Antiquities.
- Simmons, A. 2000 Villages on the Edge: Regional Settlement Change and the End of the Levantine Pre-Pottery Neolithic. In I. Kuijt (ed.), *Life in Neolithic Farming Communities: Social Organization, Identity, and Differentiation*, 211-230. New York, Kluwer/Plenum Press.
- Simmons, A. 2011 *The Neolithic Revolution in the Near East: Transforming the Human Landscape*. Tucson, University of Arizona Press.
- Tsuneki, A. 2012 Tell el-Kerkh as a Neolithic Mega Site. *Orient* 47: 29-65.
- Tsuneki, A. and J. Hydar 2008 Tell el-Kerkh 2007. *Chronique Archéologique en Syrie* 3: 75-85.
- Tsuneki, A. and J. Hydar 2011 Tell el-Kerkh 2010. *Chronique Archéologique en Syrie* 6: 39-46.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, S. Akahane, T. Nakamura, M. Arimura and S. Sekine 1997 First Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1997), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 18: 1-40.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, S. Akahane, M. Arimura, S. Nishiyama, H. Sha'baan, T. Anezaki and S. Yano 1998 Second Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1998), Northwestern Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 19: 1-40.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, M. Hudson, M. Arimura, O. Maeda, T. Odaka and S. Yano 1999 Third Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1999), Northwest Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 20: 1-32.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, O. Maeda, T. Odaka, K. Tanno and A. Hasegawa 2000 Fourth Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (2000), Northwest Syria. *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 21: 1-30.
- Tsuneki, A., J. Hydar, T. Odaka and A. Hasegawa 2007 *A Decade of Excavations at Tell el-Kerkh, 1997-2006*, Tsukuba, Department of Archaeology, University of Tsukuba.
- Tsuneki, A. and Y. Miyake 1996 The Earliest Pottery Sequence of the Levant: New Data from Tell el-Kerkh 2, Northern Syria. *Paléorient* 22/1: 109-123.
- Zeuner, F. 1957 Stone Age Exploration in Jordan, I. *Palestine Exploration Quarterly* 89: 17-54.
- 常木 晃 1995 「肥大化する集落：西アジア・レヴァントにおける集落の発生と展開」古代オリエント博物館（編）『文明学原論』99-130頁 山川出版社。